POPULAR BOOKS

昭和41年8月5日　発行

石に咲く花

著者　富田常雄

発行者　矢貴東司

印刷者　小泉輝章

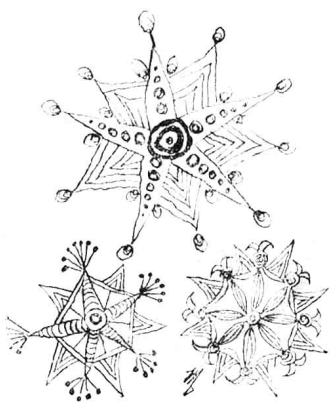
¥ 290
《検印省略》

発行所　株式会社　桃源社

東京都中央区日本橋蠣殻町1—12
電話（666）4001～2番
振替東京 64351 番

落丁・乱丁の節はお取替え致します。　1966 ©

富田常雄
石に咲く花



〈ポピュラー・ブックス〉

目次

Ecce Homo（エクセ ホモ）……七
孤独の抵抗……一八
父と子と……二四
恐ろしき夢魔……二五
雪の朝と夕べに……八三
二つの世界……一〇二
転変……一二〇
生まざりせば……一三八
闘志……一五六
日々の幸福……一七四
岸うつ波……一九一
愛憎の園……二〇八
雨けむる……二二八
夜の憩……二四八
絶壁……二六五
狂った一頁……二八二
道を指すもの……三〇〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

装幀　三井永一

石に咲く花

Ecce Homo

一

白堊の寄宿舎の玄関から、交代の、白衣の看護婦が白い花のように散つてゆくと、病棟の中に吸われるように入るのが小さく見下ろされて、秋陽のさんさんと降りそそぐ、四階の病棟の屋上には人影がなかつた。

若いインターン（実習生）の梶原宏は憂鬱な表情で、その光景を眺めてから、また、眼を牛込の高台から、眼の前の市ケ谷の外濠におとした。

未だ昼前だというのに、濠にはボートが二つ、三つ浮び、漕ぎ手の若い男と向い合つてパラソルを傾けた女の姿などが見えた。

外濠の向う側の道路はしきりなしに行き交う自動車やオートバイで賑わい、あちらから眺めたら、濠の彼方の、この白い病院は、都会の荒々しい躍動の息吹きから取り残された閑寂な置き物に見えるかも知れなかつた。

宏は、もう一度、看護婦寄宿舎の方へ眼を移した。

彼は別に、その玄関に多くの期待を持つていたわけではない。ただ、内科の看護婦の石原葉子が今日、非番であることを、きのうのコーラスの時に知つていたに過ぎなかつた。

この病院のコーラスは水曜日と土曜日の午後五時から講堂で行われ、流行の歌声運動の線に沿つたもので、葉子はアルト、宏はバスであつた。

きのう練習したのはブラームスの『眠りの精』だつたが、コーラスが終つて、講堂を出る時

「あした非番ですの」

と、葉子は不意に、なんの前触れもなく言い、前をゆく朋輩の群れに入つて行つた。いわば、挨拶のようなものなので、宏はただ頷いて見せたきりであつたが、その記憶は今日につながつて、彼は見るともなしに、寄宿舎の玄関を見ていた。

政府のやつている病院であるがために煩るさいと云うのではなく、何処の病院を例にとつても、看護婦と医局の男性とのことは、とかく云々され勝ちであり、男女ともに排撃される因を作るもので、この病院も、その例にもれなかつた。

殊に、男女のインターンは医者の玉子であり、国家試験を前にした中途半端な存在として軽視されているのは当然であつたし、まして、看護婦との恋愛などはおこがましい沙汰だつた。

父親のお古の背広を着て、すり切れた鞄に本と弁当箱とを入れて通つて来る貧しいインターンの彼はあまりにも地味な存在であり、この広い病院で、彼を知る者は極めて少なかつた。

寄宿舎の玄関から、石原葉子が軽い足取りで出て来るのが見下ろされた。
臙脂に白と黒の霞模様のあるツイードのツーピース姿は、白衣の時の彼女よりも、若く派手に、明るく見えた。
葉子は立ちどまり、ちよつと、四辺の様子を見るようにしてから、病棟の脇にある短い坂を下つて、濠端の道の方へ出て行つたが、やがて、向う側の土手に登り始めた。
勿論、明日、非番ですと云つた言葉の中に二人の逢引を暗示するものがあると考えるのは若いインターンの思いすごしに違いなかつたが、寄宿舎を出て、左右の様子に眼を配つた彼女の動作のうちに、宏は僅かではあつたが、そうした期待を持たずにいられなかつた。
葉子は土手の上に立つと、しばらく、後姿を見せて、市ヶ谷の高台の方を眺めていたが、やがて、ゆつくりと土手を濠の方へ下り始め、屋上から以外には病院の窓から見ることの出来ない土手下の草のなかに立ちどまつた。
それから、彼女は自然な動作で病棟の方を振りかえつた。
葉子にとつて、屋上の囲いに上半身をかくした宏ではその顔すら識別出来なかつたろうと思われた。
宏はそれを誘いと思うほどに自惚れもしなかつたし、胸を躍らすこともなかつたが、そこに、暗黙のなにかを感じて、彼は大股に屋上を横ぎつて行つた。
土手を下ると、葉子は草のなかにハンカチーフを敷いて腰を下ろしていた。
「屋上にいらつしやつたのね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

と、彼女は草に腰をおろした相手の横顔を見て言つた。
「そう」
「あたしも、すぐに、あなたがいらつしやるの見えたのよ。ここへ上がつて。病院の窓からは、この土手の下は死角になつて見えないということ、看護婦はみんな知つてますの」
「ライター（医局員）の連中だつて知つているな」
「きのう、何処かへ一緒に連れて行つていただこうと思つてご相談するつもりでいたんですけれど、みんなが居て、巧く言えなくて」
「一度、新宿御苑に行つたきりだつたな」
「そう、二ケ月も前」
「チャンスが摑めない、全く」
「こしらえなければ」
少し、葉子は鼻にかかつたように言つたが、もどかしさを声に現わした女性の甘い非難であつた。
「冷淡かな」
宏は苦笑した。
「少し」
「暇はあるが、このインターンの奴、財力に乏しいから誘えないんだ」
「また」

葉子は睨む真似をした。

真実の貧しい恋人同志ならば、金にめぐまれずとも、東京中を当てどなく歩き廻わつてもいいのではないかと思う。しかし、二十一才の彼女はそんな常識的な、ありきたりのことを言つて、軽蔑されはしないかと丈のびをする思いで、口にはしなかつた。

だが、葉子は宏の憂鬱のところと、ニヒルな態度に嫌悪をおぼえることはなく、かえつて魅力を感じていた。彼はそう快活ではなかつたし、口軽るでもなかつた。そして、もつとも重大なのは、彼が貧しいインターンであるのを知つていることであつた。

二

「それで、今日は単独行動なのか」

一本の煙草を抜き、宏はゆつくりと火を点けた。

「外科の永島さんと約束したのよ」

「それは惜しかつたな」

「ほんと？」

と、葉子は疑わしそうに相手を見た。

「この次にしよう」

「今度はチャンス掴んで下さるわね」

「うむ」
「映画の約束なのよ、今日は」
「もつと、気の利いた一日にすればいい」
「でも、せいぜいよ、われわれには。今日から深夜勤務でしよう。だから、せめて、映画ぐらい見なくては」
「君が歓楽の後の悲哀といつたものを感じるほどの楽しさを、うんと金と時間とを使つて作りたいな」
「後の生活が崩れてしまうわ」
「男は時々、女に対して、そうした使命を感じることがある。ほとんど、実行不可能な場合にだけだが」
「要らないわ」
それから、二人はしばらく黙つた。赤蜻蛉が草の穂をかすめて飛び、思い出したように引返して、草の葉先にとまつた。
外濠の向うを都電がけたたましい音をたて、悪いレールに体を揺りながら走つていた。
「今日は五時まで、正味四時間の休養よ」
そう言い、葉子は小さな腕時計を覗いた。
「一時間して、飯田橋の駅で永島さんと会うことになつているの」

「もう、そろそろだろう」
「そうね、あたしね、お訊きしたいことがあるんだけれど。きいていい？」
「どうぞ」
宏は草の中に煙草をすてたが、その時、彼の眼の前の崖下を国電が速いスピードで通りすぎて行った。
「皮膚科に廻つたインターンの五島恭子さんとあなたとは、どういう間柄ですの」
思いきつたような言い方であつた。一瞬、宏は眼を高台の方へそらした。
「なんでもない」
突放すように言い、彼はむつつりとして、草の穂をつまんだ。
「五島さんはお茶の水の医科歯科大学だし、あなたは信州の医大でしよう。学校が同じじやないわね」
「インターン同志だからね。併し」
「勿論、そうよ。でも、あたしは、ただ、インターン同志だからという以上のものを貴方と五島恭子さんの態度に感じてるんです。親しさ以上のものを」
「恋愛関係か」
宏は白い歯を覗かせて、にやりと笑つた。
「もし、そうだつたら、君はこんな時間も僕に割かないというんだね」
葉子は唇を噛んだままだつた。

「しかし、そうでない事を明言しておこう。五島恭子は僕の恋人じゃない」
「ガール・フレンドなの」
葉子は明るい表情にもどつていた。
「そうでもない」
「親友」
「さあ、そういうものでもないな。とも角、君は五島恭子に気を使わないでくれていいのだ」
「はつきり仰つしやつて。じやあ、どういう間柄なの」
「恋愛の相手でもないということは、君を心配させるものはなんにも無いというわけじやないのか」
「それは、あたしの感情を無視した、男の身勝手だと思うんです。奥歯にものの挾まつたような、それでいて、ご自分独りで呑みこんでいるような、そういう態度、あたし、嫌いです」
「そうか」
頷き、宏は草の中に仰向けに倒れた。
五島恭子は彼の異母妹である。年も一つしか違わぬ母違いの子であつた。もし、恭子が妾の子であつたら、彼は男の優越感から、異母妹を労わるような気持で、この若い看護婦に実情を告げたかも知れなかつた。しかし、境遇は反対であり、宏の方こそが、世を忍ぶ妾の子であつた。その上、彼は母の境遇のみじめであつたことを少年の頃から眼にし、耳にきいていた。母は世に云う妾ではなかつた。しかし、結果に於て、彼女はその境遇に堕され、彼も亦、妾の子として、日陰に育つて来た。

医科を志した恭子と宏が、この信友病院でインターンとして通うようになつたのは全くの偶然だつた。志願に依つて、全国の病院に配分される彼等が皮肉にも、一つ病院に通うようになつたまでの事ではあつたが、しかし、二人はお互いに異母兄妹であることを人に言わなかつた。

恭子は異母兄の誇りのために。

宏は屈辱感に堪えられなかつたが為めに。

「あたし、時間だから行きます」

後味のわるさを、敷いていた草の上に残した形で若い看護婦は起ちあがつた。

宏はなにも言わず、僅かにふるえる指先でうす茶色の煙草の袋から、一本をひき出しながら、そのままの片手を額のところまであげ、別れの合図をした。

三

宏の生い立ちは必らずしも不幸とばかりは言えなかつた。

母の静枝は信州松本の豪農とはいえないまでも、かなり広い田畑を持つた農家の娘で、父母の希望から東京の五島家へ、一年の約束で行儀見習いとして上京した。宏の父である五島雄作の母が、静枝の父と遠い親戚にあたつていた関係からであつた。

上京した時、静枝は十七歳で、雄作はすでに、その頃、実業界に乗出していた。勿論、未だ、健在であつた父親の五島吉兵衛の実業界での長老としての後楯がものを云つたのに違いないが、才気煥発

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo